

校名：お茶の水女子大学附属中学校

所在地：〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

電話番号：03-5978-5865

記載日：2016年 5月 20日

記載者：小泉薫

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

【附属中学校の特色】

39年の歴史を持つ「自主研究」の時間を設けている。自分の興味・関心に基づく課題を設定し研究方法を学び、試行錯誤の中で研究課題を追求し、その成果をまとめて、発表する探究的な学びのプログラムを実施している。「自主研究」では、課題を追求する力、学習意欲、論理的思考力の育成を目指している。

【附属学校全体】

・「**オールお茶の水体制**」：一つのキャンパス内に大学とすべての附属校（幼小中高）があるという地縁を活かし、日常的な連携体制を基盤として、「**教育**」「**研究**」「**運営**」の各分野において、緊密な連携性を保つ。

・幼小中高と一貫して児童生徒の**主体性自発性を尊重したアクティブラーニング**を推進している。

・**緊密な連携を可能にする各種ミーティング**：学長を長とする附属学校本部会議を中心に、附属学校委員会（運営）、学校教育研究部（教育と研究）、教育研究推進専門委員会（附属と大学の共同研究推進のための会議）をそれぞれ定例でおよそ毎月、高大連携実施委員会を年数回程度開催している。

・**附属学校教員と大学教員による教育の連携・共同**：附属学校教員の大学の授業への協力（教職科目、非教職科目共）、高大連携における大学教員の高等学校教育への協力がある。

・**公開教育研究会、合同研修会（学内・地域）、外部からの参観視察受入**を積極的に行う。

・**東村山郊外園**を大学・附属校が管理運営し、幼小中高の自然教育、勤労教育に活用している。

・附属学校の校種を超えた教員と大学教員による、**テーマ別部会（研究会）**を行ってきた。

貴校の卒業生の活躍状況について：

① 追跡調査をしているかどうか、また、その方法

→追跡調査は行っていない。

② どの程度、把握できているか、また、その情報はどこが持っているか（大学、学校園、その他）

→同窓会組織（鏡影会）がしっかりと活動しているため、卒業年別に評議員をおき、年度毎の卒業生の動向についてある程度の情報を集め同窓会全体で集約している。

③ 状況を具体的にお書きください

→各方面の第一線で活躍している卒業生も多く、同窓会（及び教育後援会）でも講演を依頼したりしている。学校でも講演会の講師や、総合的な学習の講師として、同窓会に依頼して卒業生を紹介していただく場合も多い。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

○教育

・情報活用教育

「ツールとしてのコンピュータから学習環境としてのコンピュータへ」を基本方針に、PC室、スマートクラスルームだけでなく、校内どこでも使える無線ネットワークを活用し、整備されたノートパソコンやタブレットなどICTを利活用した先進的な授業を行っている。

・全クラス担任副担任の2人体制をとり、一人ひとりに対応した充実した学級、教科、生徒指導を行っている。

○研究

・「コミュニケーション・デザイン科」創設に向けての研究開発（平成26年度～29年度 文部科学省指定）に代表される、新しい教育に向けた実践的研究への取り組み

・38年の歴史を持つ帰国生徒教育とその実践

日本語学習、英語・国語での分割授業、数学・社会・理科でのティームティーチングなど、生徒の学習状況に応じた個別指導

○社会貢献

・教育研究協議会（公開研究会）において、300名を超える日本全国の教育関係者への研究成果の発信

・国内外の教育関係者に対して学校参観、視察及び研究員を積極的に受け入れ授業等を公開している。また、教育研究会への講師派遣など先導的な立場から教育研究に取り組んでいる。

<事例1>

コミュニケーション・デザイン科（CD科）

[研究課題]

図表や統合メディア表現を活用して発想や思考を深めたり、効果的に表現・交流したりすることを系統的に学ばせる新教科（コミュニケーション・デザイン科）を設定し、課題解決・探究・解決を支える思考・判断・表現の力を高めていく教育課程の研究開発

現在、文部科学省教育研究開発学校の指定（平成26年度～29年度）を受け、総合カリキュラムの時間内に、道徳・特別活動・自主研究・総合的な学習の時間と併せて、新教科「コミュニケーション・デザイン科（CD科）」を設置している。

この教科では、CD [A]（CD科基礎：協働的課題解決を支える基礎指導）と、CD [B]（CD科活用：テーマ探究学習での活用指導）の2つを柱として、協働的課題解決の場面で、図解化など様々なツールを活用して自分の考えをまとめたり、話し合ったり、統合メディア表現によって効果的に伝達発信したりするための考え方や表現方法を学ぶ。

特にCD [B] は総合的な学習の時間とも密接に関連させている。

◆教科名の意味

教科名の「コミュニケーション・デザイン」とは、「協働的コミュニケーションを効果的にデザインする（構成・創出する）」ことを意味している。すなわち、論理的・創造的な思考力を働かせて問題解決のための構想や計画を練り、よりよい生活や社会の実現を目指す協働的コミュニケーションを創出していくプロセスとしての知的・生産的行為である。

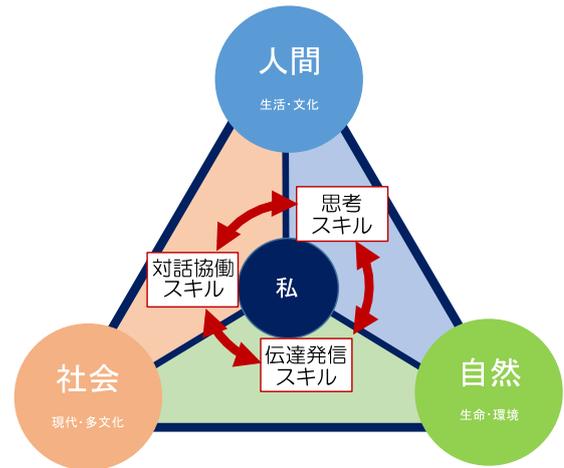
◆教科目標

[目標]

思考力・発想力を高め、協働的に問題を解決するためのコミュニケーションを意図的・効果的に創出する能力を育て、よりよい社会の実現をめざす創造的・協働的資質の基礎を養う。

◆教科内容

新教科の内容については、協働的課題解決を支える思考・判断・表現の力の基礎指導を行う「CD[A]:コミュニケーション・デザイン基礎」(協働的課題解決を支える基礎指導)と、それらを活用して生活や社会の中の課題を考える「CD[B]:コミュニケーション・デザイン活用」(テーマ探究学習での活用指導)の2領域で編成している。



<事例2>

自主研究

昭和53年(1978)年から「自主研究」の時間を設けている。自分の興味・関心に基づく課題を設定し、自分なりに方法を考え、試行錯誤して追究して、その成果を工夫して発表する、主体的な研究活動の時間である。



1年生では自分の興味関心を見つけ、探究の方法について学び、2年生では、自分で設定した課

題について、同じジャンルのテーマを持つ先輩や顧問の先生のアドバイスを受けながら課題を追究し、ポスターを作って発表する。

3年生では、2年生からの研究を完成させ、その成果を大学講堂での発表会や生徒祭で発表し、研究集録にまとめる。このような活動を通し、課題を追究する力、学習意欲、論理的思考力の育成を目指している。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

本校は公開研究会、参観・視察や研修の受け入れを行い、全国に向け研究成果等の情報を発信している。また、地域（東京都及び文京区）に対しても研修の場として開かれた学校を目指している。また、大学と協力しながら、地域の教育関係者、研究者、保護者、生徒が利用できる研究センターの設置を目指している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校は、生徒の「自主研究」を対象とした教育研究、および帰国生徒教育研究があり、いずれも40年近い歴史がある。まず、「自主研究」は生徒が教科を越えた自分の関心のあるテーマを選択し、2年かけて研究を深め発表するものである。

これは附属小学校の「自学の時間」で学んだ基礎力が中学で応用され活用されているものといえる。さらに、附属高校では附属中学卒業生がリーダーシップを握り、SGHで取り組んでいるようにグローバル社会の問題解決に向けた研究活動に生かされている。こうした小・中・高と連結した自主性が育まれることによって、生徒たちが社会に向けて発信していく力が同じキャンパス内で段階的に育成されている。

次に、帰国生教育研究は、文化的に多様な地域の言語や文化の体験を持つ生徒たちの良さを認め、学校全体がマイノリティを受け入れる体制、雰囲気醸成されている。1年目は帰国生のみで編成されているクラス、2年目以降は混在するクラスというように、異文化適応のプロセスを考慮した編成プログラムとなっており、教員はきめ細かい個別指導をしている。現在のグローバル社会に対応できる学校の多文化共生のあり方を示しているといえる。

さらに、情報活用教育も本校の特色の一つであり、デジタル教材を活用し、電子情報ボードとタブレットを使った教師・生徒による双方向授業の開発や協働的学習へのICT機器の活用方法の開発など、全国に先駆けた先進的な取り組みを続け、研究成果を内外に発信している。

最後に、最も重視してきたのは、新たな教育課程や教科等の開発に取り組んできたことである。その成果は、総合的な学習の時間での取り組みをはじめとして、日本の教育のあり方に大きな影響を与えている。平成26年度から29年度にかけて文科省から研究開発学校の指定を受け、新教科「コミュニケーション・デザイン」科に取り組んでいるところである。

これらの教育課程、教科等の開発研究には、その基盤となる本校の長年の多岐にわたる研究の蓄積が財産であり、それらを可能にする学校体制ができている。大学と附属校園が同一キャンパスにあることを活用し、研究者と日常的に交流し研鑽を深めることも可能にしている。

このようなダイナミックかつ柔軟な教育研究を行い、日本の教育をリードしていくことが本校をはじめとしたお茶の水女子大学の附属校園としての使命であると考えます。